第二回ピースボート「旅と平和」エッセイ大賞　次点作

世界中の人々が平和でなくて、どうしてこの世界が平和であると言えるのか ／加藤剛矢さん（22歳）

昨年、僕はアメリカにいた。ニューヨーク・ブルックリン。ニューヨークという響きは、どこか眩しいものを感じさせるが、僕が行ったブルックリンはアメリカの格差社会というものを凝縮したような地域であると言っても過言ではない。ニューヨーク・マンハッタンという世界経済の中心地から、橋を渡ってすぐにあるブルックリン地区には、人種を問わず、文化を問わず、世界中の人々が居住している。

僕がブルックリンに行った理由は、そのような実態の調査と、海外経験の乏しい自分に世界を直接見る必要性を感じていたからだ。調査はゼミのA君と共に行い、二ヶ月間滞在し、フィールドワークを実践した。観察、インタビューを毎日続け、ある一つの活動を継続して行った。

アメリカの格差社会は、拡大の一方であると言われるが、実際に見たそれは深刻であった。そして、そうした事実は自分がそれまで世界に積極的に目を向けず、自らの周りの小さい世界に留まっていたということを僕に思い知らした。

ワシントン空港に到着し、地下鉄に乗った瞬間から、そのような衝撃は始まっていた。座席に座りA君と、ユースホステルにまず行こうと話していた時、突然、三人のアフリカ系アメリカ人がダンスをし始めた。一人がラップをし、残りの二人は車内の手すり代わりの鉄の棒を利用し、ダンスをし始めた。車内の椅子に座っている僕達や他の人達は、まるで何かのショーを見ているかのようだった。

そして、ショーが終わると、彼らは僕らに近づいてきた。チップを求めに来たのだ。僕らは、近寄ってきた彼らの衣服を見てみるとボロボロなものだと気が付いた。僕は1ドルを差し出し、ホステルの最寄駅だったのでA君と共に電車を降りた。チップを差し出したのは僕らだけであった。電車を降りた後も、僕らはただただあっけにとられていて、電車が見えなくなるまで見ていたが、さっきの彼らが今度は隣の車両に移動していくのが見えた。

到着した翌日、僕達の調査活動はすぐに始まった。昨日の出来事は、アメリカという国では地下鉄の中でパフォーマンスをしチップを与えるのだという、ただ単純な出来事ではないとA君と共に感じていた。その背景—彼らが普段、何の仕事をし、どのような生きがいを持ち、何に悩んでいるのか—を僕達は知らなければならないと思った。

僕らが主に調査をしたところは、シープヘッドベイとウイリアムズバークだった。シープヘッドベイは海岸近くにあり、海を越えた遥か東にはイギリスがそびえる。この地域にアジア系は住まない。主に住んでいるのは、アフリカ系、ヒスパニック系だ。茶色の20階建てのアパートがいくつもそびえる。それらは生活保護を受給している人のものだ。人々は歩く僕らに不思議そうな目を向ける。もちろんスターバックスのような洒落たお店はない。あるのは小さなコンビニとピザ屋。

僕は、そのコンビニの近くでタバコを吸っている同年齢くらいの青年に声をかけた。声をかけたのは、彼が手にグローブを持っていたからだ。僕は高校球児だった。

「ハロー・アイハブクエスチョン。ドゥーユーハブタイム」と僕が言うと、なんでもいいよ、と彼は答えた。

「僕達は日本から来た。本当のアメリカを知りたくて。ところで君は普段仕事は何してるの？」

彼は、仕事は土木、道路建設、日本に行きたいなと答えた。

僕は日本で学業のかたわら土方系のアルバイトをよくしていたから、僕はもっと彼に親近感が湧いた。

「日本は素晴らしい国だよ。でもアメリカも素晴らしいと思う。ところで君の家は近くかい」と僕が言うと、目の前のさっき見たアパートを彼は指差し「あそこだよ。ニューヨークでも特に貧しい所で、ご覧の通り観光客はたいてい来ない。アメリカ人の中でも、釣りとか、海で泳ぐとかで、たいていは来ない。アジア人はまとまって住むよ、ここに来る時にチャイナタウンがあったろ、あそこだよ」と言った。

僕達は彼から彼のすすめでタバコを一本もらい、聞きにくいことを言った。

「アメリカをどう思う。生活は苦しいの？君は幸せかい？」

急にシリアスでセンシティブなことを僕達が聞いたから、彼は「君たちは牧師か何かかよ」と笑い、「見ての通り、アメリカは貧しい。少なくともブルックリンのこの地区は貧しい。お隣のマンハッタンは、同じアフリカ系でもものすごいほどの

お金持ちがいるけどね。だけど、ここでの僕の生活は例外なく苦しいと思う。僕達が今立っているこの小さなスーパーの隣のこの建物は介護老人ホーム。

唯一、この地域に白人がいる。アメリカのお偉いさんが、あえて、この地域にそういう老人のための施設を持ってきたのかもしれない。ただ海が近くで綺麗だからかもしれないよ」と言った。そして、「幸福と感じてはいないけれど、生活のために働く日々は結構楽しいものだ」と彼は付け加えた。彼とは最後強く握手をして別れた。

僕とA君は、格差社会という問題だけに今まで目を向けていたことに気づいた。格差社会の中で、特に下層で生きている人がどのような生活をしているのかを僕達は話を聞くまで知らなかった。日本にいた時は、ただ「可哀想」としか思っていなかった。テレビや本で取り上げられる格差の拡大を、ただ重大な問題だとだけ捉えていた。僕達の「可哀想」という思いは、彼らにとっては実は迷惑な慈愛なのではないかとも思った。

世界を実際に見て、観察し、人々と触れることで、本当に僕らがするべきことが分かるのだと知った。そして、平和を実現するには、ただ遠方から「可哀想だから」と手を差し伸べるのではなく、積極的に何か行動を起こさねばならないと知った。

僕らの活動は、一週間後にはさらに違ったものになった。アート・ワントライという活動を始めたのだ。ホームレスや見るからに恵まれない境遇の人に画用紙と絵の具のついた筆を差し出し、一筆書いてもらうのだ。そして、彼らにウォーターボトルを一つ与える。最終的には多くの人の手によって一つの虹ができる。

水は生きるために最も必要なものであるし、虹を感じる心は平和だからこそ生まれるものだと僕達は考えた。そして、もちろんこの活動の根幹には「可哀想だから」という思いはなかった。同じ人間として手を差し伸べて当然だという強い思い、平和を願う思いが根幹にあった。

虹はいくつもでき、一筆添える人々の顔には微かな笑顔があった。活動は帰国するまで継続することができた。僕は嬉しかったが、満足してはいけないと思っている。必死に生きる彼らの姿に手を差し伸べ、それでもし、そのことに自分が満足してしまったら、本当に助けてほしいと思っている人を助けられないと思うからだ。

アメリカという世界をリードする国の中でも、多くの人が明日のご飯を得るために必死に生きている。日本でも同様だとあなたは思うかもしれない。僕も学業のかたわら、生活費を稼ぐために働いている。

でも、文化や人種が混じり合うアメリカ社会では、生活費を稼ぐということは、日本のようにアルバイトをすれば単純に可能なことではなかった。人種差別、ビザの問題、教育格差という問題がアメリカの格差社会を深刻にしていた。だが、それでも日本やアメリカはまだ恵まれていると今では思う。

働き生活費を稼ぎ、ご飯を食べられるだけまだマシなのだ。インタビューをした人のなかに、シリアから移住してきた難民がいた。彼は働いても食べることができないことがあったと言った。彼は今話題のイスラム国が成立する前にアメリカに来たという。長く続く内戦、紛争下においては職を得ていても食べられないことがあったのだ。飢餓や食糧不足といった事態は、降雨不足などによるアフリカだけの話だと思っていた。

二ヶ月間の活動では１００名を超えるいろんな人に出会った。キリスト教に熱心なホームレス、路上ドラマーで生計を立てる人、病気の妻のためにチップを稼ぐサブウェイサックス奏者。彼らは人生とアメリカに一見失望しているように思えたが、実はそうではない。人生とはこういうものだと強く自覚し、強く生きていた。

それは安易な悟りではなかった。だが同時に、弱り果てていた人もいたことは事実だ。だから今、僕の胸には、「世界中の人々が平和でなくて、どうしてこの世界が平和であると言えるのか」という強い思いがある。

僕は、この経験を活かさなければいけない。テレビを通して、ただ事実を知るだけではダメだ。自分の目を通して知り、考え、そして実際に行動に移さなければならない。でも、僕はもっと世界を実際に見る必要がある。もっともっと見て知って、誰かのために活動したい。だから、僕は旅に出たい。